



TITLE:

尊攘堂誌

AUTHOR(S):

京都帝國大學附屬圖書館

---

CITATION:

京都帝國大學附屬圖書館. 尊攘堂誌. 1940: 1-42

ISSUE DATE:

1940-10-27

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/201972>

RIGHT:

Title	尊攘堂誌
Author(s)	京都帝國大學附屬圖書館
Citation	(1940)
Issue Date	1940-10-27
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/201972">http://hdl.handle.net/2433/201972</a>
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

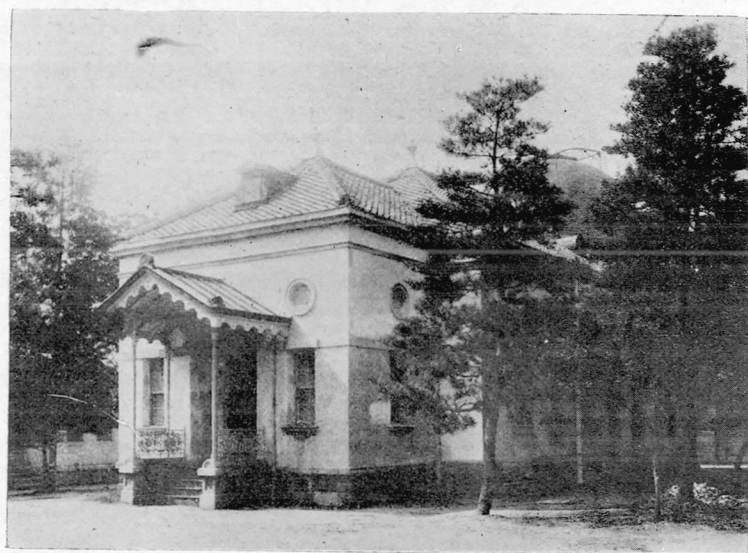
昭和十五年十月

皇紀二千六百年記念

尊攘堂誌

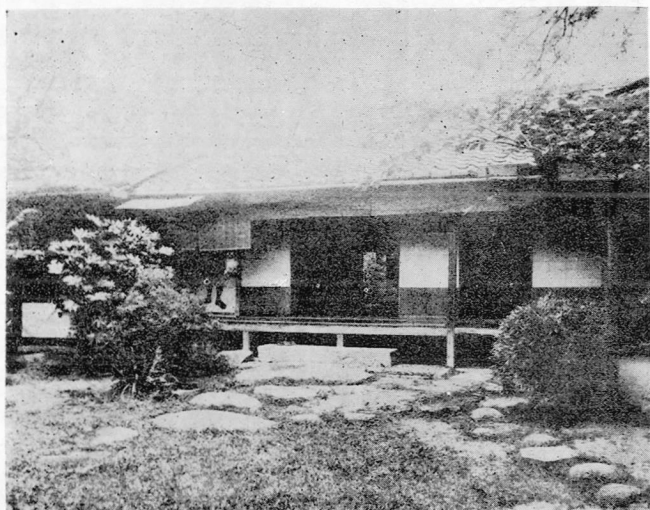


筆染御王親仁巖宮川栖有

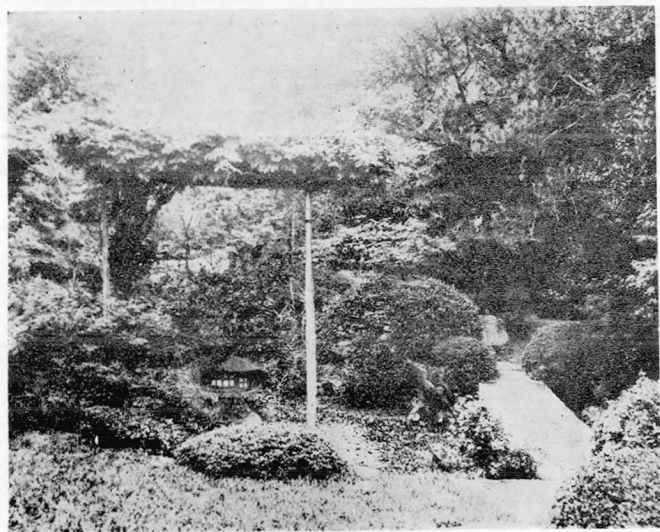


圖景全堂懷尊





舊尊攘堂表座敷圖

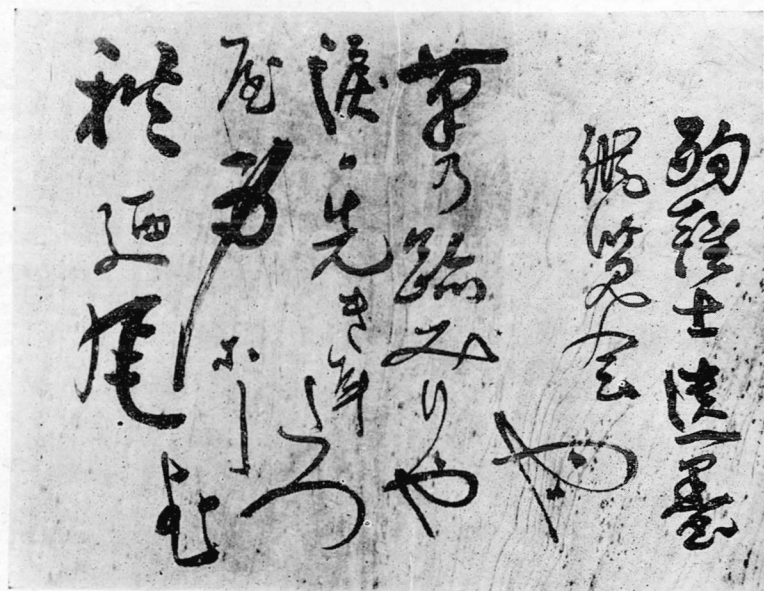


同上  
前庭ノ圖





創設者 品川彌二郎子爵小照（五十三歳）



品川子爵筆蹟

## 序

光輝ある紀元二千六百年奉祝の秋を迎へ、東亞の新秩序將に成らんとして、世界政局の變轉は實に端倪すべからざるものあり。

尊攘精神の昂揚、今日より急なるはなし。恰も大祭を勤修するの歲に當り、一二記念の事業を行はんとするに際し、先づ本誌を改編し、一は以て先賢の偉業を偲び、他は以て民心作興の一助に資せんとす。たゞ匆卒の際、不備の點あるを免れずと雖、そは他日の是正を期し、茲に之を上梓することとせり。尙中山太一・杉道助兩氏は尊攘堂の祭典及記念事業に對し、深く賛意を表せられ多大の後援

を賜はりたり。本誌の刊行亦その好意に倚る。一言を附加して  
以て序と爲す。

昭和十五年十月神嘗祭の日

京都帝國大學附屬圖書館長 本庄 榮 治 郎

# 尊攘堂誌目次

寫眞版

一 有栖川宮熾仁親王御染筆「尊攘」の額面

(卷頭)

尊攘堂全景圖

二 舊尊攘堂表座敷圖

同上 前庭ノ圖

三 吉田松陰先生畫像 松陰先生自讃 松浦松洞筆

四 尊攘堂創設者 品川彌二郎子爵小照 (五十三歳)

品川子爵筆蹟

五 尊攘堂藏品目錄 (初頁) (品川子爵筆蹟) 一八一元

序

一 尊攘堂の由來 五

二 尊攘堂祭典	一四
三 尊攘堂藏品	一七
四 遺墨・遺品主要目錄	一九
五 尊攘堂創立者 子爵品川彌二郎略傳	二六
六 尊攘堂委員	三〇
七 尊攘堂年譜	三三

以上



# 尊攘堂誌

京都帝國大學附屬圖書館編

## 一 尊攘堂の由來

京都帝國大學構内の尊攘堂は、明治二十年三月、故品川彌二郎子爵が其先師吉田松陰の遺志を紹きて、京都高倉通錦小路（今の銀行集會所）に建てられたものである。松陰先生は夙に京都に尊攘堂を建てて勤王志士を祀り、天下の人心を振興せんとする志を懷いて居られたのであつたが、其志を果すの機なく、刑死に先だつ一週日、即ち安政六年十月二十日、江戸傳馬町の獄中より、左の書を門下の入江子遠（通稱九市）に寄せて後事を託せられた。

兼て御相談申置候尊攘堂設置の事儀は彌々念を絶候。此上は足下兄弟の内一人は是非僕が志致ニ成就ニ被レ吳候事と願母敷存候。春已來の在囚飽まで讀書も出來思慮も精熟人物一變なるへくと殊に床敷日夜西顧父母

を拜する外先第一には足下兄弟の事を思出し候。尊攘堂の事は中々大業にて速成を求めては却て大成出来  
 不<sub>レ</sub>申又亡命等にて出國候ては往先の不都合も有<sub>レ</sub>之候故、足下出牢の上は先慈母の心を慰め、兄弟間遊學の  
 事も政府邊の指揮を受けての事が宜敷、是は小田村其他の諸友も随分盡力致すべく候。扱僕も來<sub>ニ</sub>江戸<sub>一</sub>天下  
 の形勢一覽致し餘程知見の進み候處有<sub>レ</sub>之、神州未だ地に墜ちず人物も随分有<sub>レ</sub>之事承知委細に御話申度候  
 得共不<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>心候間唯々何事も心強く不<sub>レ</sub>抛様御心懸專一に存候、尊攘堂の事に付ても一策を得たり御聞及も  
 候半堀江克之助と申水戸の豪士あり羽倉の三至錄に久保善助とあるは此人也、丁巳墨使登營の節信田・蓮田  
 と共に墨使を討たんことを謀る、兩田は獄死、堀江は今に東口揚屋に在、(此人の事は通々工子(高力)杉へも申達然此人殊の外神道を  
 尊び天朝を尊ふ人なり、毎々被<sub>レ</sub>申候事に神道を明白に人々の腹へ入る如く書を著し天朝より開版して天  
 下へ御頒示被成度と頻に祈念仕被居候、僕が心得には教書のみ天下に頒ても天下の人心一定と申様には難  
<sub>レ</sub>參に付京師に大學校を興し上 天子親王公卿より武家士民まで入寮寄宿等も出来候様致し乍<sub>レ</sub>恐 天朝の  
 御學風を天下の人々に知らせ天下の奇材英能を 天朝の學校に貢し候様致候得は天下の人心一定仕るに相  
 違無し、併急に京師へ大學校を興すと申しては只今の時勢迎もく出来ぬ事と誰しも可<sub>レ</sub>存候へ共是に亦  
 策あるべし、小林民部より承り候只今學習院は學職方は公卿なり儒官は菅清家と地下の學者と混して被<sub>ニ</sub>  
 相務<sub>ニ</sub>定日ありて講釋有<sub>レ</sub>之、是日は町人百姓まで聽聞に出候事勝手次第勿論堂上方御出席也、然れば學習  
 院の基に依り今一層致<sub>ニ</sub>興隆<sub>一</sub>候へは何様にも出来可<sub>レ</sub>申、扱學問の筋目を糺し候事が誠に肝要にて朱子學  
 しやの陽明學しやのと一偏の事にては何の役にも立不<sub>レ</sub>申、尊皇攘夷の四字を眼目として何人の書にても  
 何人の學にても其所長を取る様にすへし、本居學と水戸學とは頗る不同あれども尊攘の二字はいつれも同

し、平田は又本居とも違ひ癖ある所も多けれども出定笑語、玉澤等は好書也、關東の學者道春以來新井、室、徂徠、春臺等、皆幕に倣しつれとも其内に一二ヶ處の取るべき所はあり、伊藤仁齋などは尊王の功は無けれども人に益ある學問にて害なし、林子平も尊王の功なく攘夷の功あり、兼て御話申候高山、蒲生、對馬の雨森伯陽、魚屋の八兵衛の類は實に大功の人なり、各神牌を設くへし」右諸家の書を聚め長を拔取人物格別功あるは學習院中へ神牌を設くる等の評議は中々大議に付天下の人物を聚めれば不出來、人物聚らすとも諸國へ京師より人を遣し豪傑の議論を聞聚め京師にて大成すへし、此議論中に天下の正論大に起るへし、又水戸日本史の後も無レ之天朝六國史の後も缺く、天皇の御諡號も光孝天皇までなり、其後の帝紀御撰述諡號御定等勅諭にて學習院被ニ仰付ニ度事也、尤も是は書籍と人物と大に學習院に集りたる上の事也

#### 學習院興隆の事

- 一 天下有志の者出席を免し玉ふへき事(居坐密語を免す)
- 一 天下有用の書籍獻上を免し給ふへき事(古書近世書に不限)
- 一 尊攘の人物の神牌を立て玉ふへき事

但神代の神々式内の神々も時宜を酌て院中に祭るへし、其以下菅公、和氣公、楠公、新田公、織田公、豊臣公、近來の諸君子に至るまで其功德次第神牌を立てる也  
向に御相談申候尊攘堂の本山ともなるへし

人物集り書籍集りたる上にて神道を尊ひ神國を尊ひ天皇を尊ひ正論計り拔取一書として天下に頒つへし

△慶比の人清原某神代卷跋、松苗十八史畧序、此二篇小子深く心服仕る論なり

一 院中に史局を設け六國史以下の缺を補ふ事

右等の趣向を眼目として御工夫を御こらし可<sup>レ</sup>然候、他日御出國出來候はゞ先大原公父子へ御謀り公卿方の御論御伺、又關東下向堀江共御相談被<sup>レ</sup>成天下同意の人々申合そろく京師にて御取建可<sup>レ</sup>然、尤も湖城鯖江等威權を振ふ間は少し御見合可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>成候、近年の内兩權仆るへし京師も九條公御辭職あらん、其後よき關白ありて關東と御一和の事も調候はゞ其節妙也、其内夷事も日々禍深く相見え候に付好機會の出る事もあらん何分京と關東との形勢を熟覽してとうも六ヶ敷は最前の論の如く吉田にてなすなり妙なれば學習院へ出るなり、此所は足下の眼中にあれば委くは難<sup>レ</sup>申候、堀江何卒出牢させ度もの也、僕より勝野保三郎へ申遣置候山口三輔なと好策なきかと申遣置候、堀江出牢と御開被<sup>レ</sup>成候はゞ早速諸事御通信可<sup>レ</sup>然、僕天下の士を多く見候得共無學にして篤志なること如<sup>レ</sup>此人は多く見不<sup>レ</sup>申實に奇人なり、可<sup>レ</sup>學可<sup>レ</sup>類別符一通御覽此人の心中察給へ

僕出國以來五ヶ月に相成候得共小田村久敷等一書もなし足下は在獄なればせん方なし、僕においては不<sup>レ</sup>苦事には候共諸友の疎濶は志の薄き故かと大に懸念致候此事兄出牢せば一論あるべし、作間、彌二、徳民なとのこと甚懸念也、此三人は決して變せぬに相違はなしと存候、岡部是亦不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>棄、此四人兄幸愛<sup>レ</sup>之、福原は長進と察候何如にや、佐世も心にかゝり候、來原、中村、餘り周布風を學び大人振り後進を導くと不<sup>レ</sup>能るか患なり、中谷は自妙、山口にて一世界をなせかし、要<sup>レ</sup>之諸人才氣麗観天下の大事を論するに不<sup>レ</sup>足、吾か長人をして萎爾せしめむ、殘念々々、足下久坂とのみ頼むなり、高杉大に長進とは察候得共此地にて

も十分の議論せず、歸國大に残多事共なり

未十月廿日

子遠兄 足下

松 陰

松陰先生は『留魂録』に於てもまた、堀江を推奨して――

「堀江常ニ神道ヲ崇メ、天皇ヲ尊ヒ、大道ヲ天下ニ明白ニシ、異端邪說ヲ排セント欲ス、謂ラク 天朝ヨリ教書ヲ開版シテ天下ニ頒示スルニ如カズト、余謂ラク教書ヲ開版スルニ一策ナカルヘカラズ、京師ニ於テ大學校ヲ興シ、上天朝ノ御學風ヲ天下ニ示シ、又天下奇材異能ヲ京師ニ貢シ、然ル後天下古今ノ正論確議ヲ輯集ソ書トナシ 天朝御教書ノ餘ヲ天下ニ分ツ時ハ、天下ノ人心自ラ一定スヘシト、因テ平生子遠ト密議スル所ノ尊攘堂ノ議ト合セ、堀江ニ謀リ、是ヲ子遠ニ任スルヲニ決ス、子遠若シ能ク同士ト謀リ、内外志ヲ協ヘ、此事ヲ少シク端緒アラシメハ、吾ノ志トスル所モ亦荒セズト云フヘシ、去年勅使繪旨等ノ事一跌スト雖モ、尊皇攘夷苟モ已ムヘキニ非レバ、又善術ヲ設ケ前緒ヲ繼續セズンハアルベカラズ、京師學校ノ論亦奇ナラズヤ」

と記してある。以て其の志すところ明白である。

しかるに、此書は不幸にして子遠の手に達せずして、子遠も亦元治甲子の難に殉じ、先生の遺志は空しく二十餘年間埋没してゐたのであつた。ところが、偶然の事から、品川子爵は此書の水

戸に得られて感慨に堪へず、遂に獨力を以て先生の遺志を果さんと決心せられ、明治二十年の春、獨都伯林より歸朝せられるや、直ちに地を前記の處に卜し、此處に尊攘堂を創設せらるるに至つたのである。此地域（約七百餘坪）元典藥頭三角氏の別邸であつて、遠くは源賴政の邸址とも稱せられ、瀟洒たる屋宇、幽邃なる庭園、閑雅なる泉石、亭池などの布置や結構は熱鬧の市中に在つて別に一天地を劃するの觀があつた。子爵は之に修理を加へ、増築を施して、其の中に維新前後の勤王志士の靈を祀り、同時に此等志士の殉難事蹟に關する史料、遺墨、遺品等を極力蒐集して、毎年壯嚴なる祭典を営み、一般公衆の參拜をも許し、且つ藏品を縦覽せしめられた。これは一には以て先賢追懷の意を盡し、又一には以て國民の志氣を鼓舞激勵せんが爲めであつた。子爵は居常多端の身を以てして、猶且つ毎年之を繼續執行すること十數年の久しきに及ばれた。四方の有志此舉を聞きて志士の遺墨、遺品を寄贈し來るもの相次ぎ、藏壁實に千數百點の多數に達するに至つた。然るに子爵は、此等の貴重なる記念品を一家の私有と爲すを屑しとせられず、京都在住の有志中より尊攘堂保存委員二十餘名を選定して、之に將來の事を依託せられた。前述の如く藏品の漸次増加するに伴ひ、堂内は次第に狹隘を感じ、且つ建築も八十有餘年の久しきを経過せる爲め腐朽の箇所も尠からず、加之商厦櫛比の中に在つて火災等のことなどを慮られ、保存委員と

も計り、永久に維持保存の方法を講究中であつたが、不幸にして病に罹られ、明治三十三年二月二十六日遂に溘焉薨去せられたのは、この事業のためにも痛惜に堪へぬ次第である。

是に於て保存委員松本鼎等は、子爵の嗣子彌一、及び子爵野村靖等と協議の結果、所藏品全部を京都帝國大學に寄贈し、且つ同學内に尊攘堂を新築寄附することに決定し、同年十月、其旨を文部大臣に稟請した。

(前略) 吾輩等熟議の上、諸書類を整理し、尊攘堂及諸藏品共之を御省に獻じ、京都帝國大學圖書館の附屬と爲し、藏品を陳列し時々之を公衆へも拜覽せしむるに於ては、永久保存の道立つのみならず、先師吉田松陰、故品川彌二郎の遺志の如く士氣を作興し、學風を振起するの一端とも可相成儀と奉存候。御省に於ても、其情狀を御採納あつて、前陳の通り御許可被下度、然る上は大學指定の地へ尊攘堂及文庫等を建築し相渡し可申、其方法の如きは大學總長と協議し其指揮に依り可申、此段奉懇願候也

翌三十四年二月二十一日、當局の許容するところとなり、先生の宿志たる京都の大學に子爵の企望たる尊攘堂が併せて成就することとなつたのは、洵に奇しき縁とも謂ふべきである。

明治三十四年六月、品川彌一、野村靖、松本鼎及び品川家の親族山縣伊三郎、山根正次、中村精男、平田東助、及び島地默雷等の外、尊攘堂委員阿武素行以下三十一名は、連署を以て、自今毎年十月二十七日(松陰忌)及二月二十六日(品川忌)の兩日、尊攘堂を借受け、兩先賢始め勤王諸



烈士の祭典を営むこと、及び同時に藏品を陳列して公衆に展覽せしむることを、更めて京都帝國大學に出願して、時の總長木下廣次博士の許諾を得た。尙ほ翌三十五年三月、前記諸員會合協議の上規約を設け、祭典資金を積み立て、毎年其の利息を以て春秋二回の祭典費に宛つること等詳細なる事項を協定し、此規約は委員歿後も其の相續者相承け永く其の履行に當る誓約をもした。

尋で三十六年四月に至り、大學構内の尊攘堂新築工事(洋式建築 五十三坪)成り、藏品一切(一千二百四十九點)の移搬を見た。此を以て木下總長は、右寄贈品を附屬圖書館長島文次郎に命じ、特別に保管せしむることとしたが、安全を期する爲め、平時は之を圖書館内の貴重書庫に收藏し、必要に應じ、隨時之を堂内に陳列することとした。爾來此に三十有餘年、當時の保存委員多くは物故したが、其の繼嗣者相承け、毎歲渝らず祭祀の典を續け、大正十年以降、更に京都帝國大學の容認を得て、秋季一回とし、例年は小祭を営み、三年目に大祭を行ふことに更め、保存委員を單に祭典委員とした。

昭和十二年は恰かも尊攘堂創立五十周年に當り、盛んに大祭を執行することを得たが、他方支那事變の勃發を見、時局は益々重大となり、尊攘精神の昂揚を要し、士氣激勵の愈々緊切なるを覺ゆるの機に際會したので、祭典委員は諸般の事情に鑑み、その資金を京都帝國大學に寄附し、

自今大學側に於て適當の方法によりて祭典をも主宰せられんことを請ひ、以て尊攘堂設立の趣旨達成を永久確實に期せんとするに到つた。本年の大祭は實に大學の手による第一回大祭に相當し且つまた記念すべき皇紀二千六百年に際會したことは、偶然のこととは言へ、其の意義の深甚なるに感慨大いなるものがある。

**附 長門尊攘堂** 山口縣長府にあり、品川彌二郎の遺囑により、桂彌一の主唱にて、毛利家その他の援助を得て、財團法人を組織し、昭和六年起工、同八年に竣工した。その目的は京都の尊攘堂と同じく、また其の堅年なる建物には遺墨類が陳列され、志士の遺風を偲ばせるものがある。

## 二 尊攘堂祭典

尊攘堂は毎年十月二十七日(松陰忌)京都帝國大學内に於て例祭を執行する。當初は規約に依り春秋二回(十月二十七日の松陰忌及び二月二十六日の品川忌)祭典を執行してゐたのであつたが、その後春季(四月第一土曜日)一回舉行に改めてあつたのを、大正十年以後は更に秋季(十月二十七日)に一回例祭(小祭)を營み、三年目に一回大祭を執行することに改めた。例祭當日は吉田、品川兩先賢(各木像安置)を始め勤王諸家の靈を祀り、大學總長をはじめ、學部長、圖書館長、教職員、舊尊攘堂委員等參列することとなつてゐる。大祭の際には前記の外、朝野の名士を招待して講演會を開き、遺品、遺墨の展覽會を催し、學内はもちろん、一般の觀覽を許してゐる。又當日は參列者に志士遺墨に因める記念品を頒つを例とする。

尊攘堂にとりて特筆すべきことは、明治三十六年五月八日、新築落成後間もなく、時の 皇后陛下(昭憲皇太后)本學に行啓あらせられし際、勤王志士の遺品、遺墨を台覽遊ばされ、尋で大正十一年十一月十五日、時の 皇后陛下(今の皇太后陛下)本學に行啓あらせられ、特に尊攘堂に玉歩を枉げさせられ、畏くも兩先賢の木像に御會釋を賜ひ、陳列中の松陰先生の遺書、遺什をはじめ

め、かすかすの遺品に台覽の榮を賜つたことである。

昭和三年十月は松陰先生歿後恰かも七十年に當るので、祭典委員等は大學當局と計り、同年十一月舉行せらるべき登極御大禮を期とし、尊攘堂の大祭を執行し、松陰先生始め勤王諸家の偉績を偲ぶと共に、民心作興の一端に資せんと企望してゐた。會ま農林大臣山本悌二郎は、品川子爵に縁故淺からざる故を以て、深く此舉に共鳴せられて、多大の援助を與へらるることとなつた。

よつて種々協議の上、竟に十一月十八日を以て祭典を執行することに決定し、諸般の準備を整ふるに至つた。かくてその前日たる十七日には、御滯洛中の秩父宮、同妃、高松宮並に賀陽宮、同妃の五殿下、格別の思召を以て、御摘ひ尊攘堂に台臨の上、遺品、遺墨等台覽の榮を賜はり、關係者一同は深き感激を覺えたのであつた。翌日は豫定の如く午前十時より祭典を行ひ、山本祭典委員長の祭詞宣讀に續き、志士遺族子爵野村益三、男爵福原俊丸等玉串を捧げ、來賓として参列の内閣總理大臣田中義一以下多數顯官名士の参拜もあつた。午後は山本悌二郎、徳富猪一郎、武岡豐太の記念講演が大學大講堂で開かれ、又勤王志士遺墨展觀も圖書館閱覽室で催されたが、何れも非常の盛會であつた。尙ほ十九日には一般の参拜觀覽を許すこととなり、入場者數千人に達し、尊攘堂設立の趣旨も一般に了解せられ、世道人心に尠からず好影響を與へた。

更に昭和六年五月十九日には、東伏見宮大妃殿下の御成りありて、志士の遺墨、特に御祖父岩倉具視公の遺墨を御熱覽遊ばされ、近くは昭和九年十月二十七日の大祭に、久邇宮多嘉王並に同妃兩殿下台臨あらせられ、陳列遺品に台覽の榮を賜りたるなど、重ね重ねの恩寵光榮に浴したることは、一同の感激は申すまでもないが、兩先賢はじめ勤王烈士の靈も亦、地下に感泣せしことと想察せられ、眞に有難き極みである。

### 三 尊攘堂藏品

尊攘堂の藏品は、品川子爵の舊藏に係はるものが、固より多いのではあるが、尊攘堂設置の趣旨を贅して、四方有志より寄贈したるものも亦尠くない。而して京都帝國大學に引繼ぎを了りたる後に至りても、尙ほ尊攘堂の藏品となすべき旨を指定して、寄贈を爲し來るものもあつて、藏品は次第に増加をみつつある。

今之を掛物、巻物、書籍、帖、寫眞、額面、遺品及屏風に分類すれば總點數千三百四十七點となる。之を更らに専ら幕末時代に關するもの、幕末より明治時代に渉るもの、専ら明治時代に關するもの及び雜類の四種に分類して、之を表示すれば左の通りである。

尊攘堂藏品分類點數表 (昭和十五年十月十五日現在)

品目	専ら幕末時代ニ關スルモノ	幕末時代ヨリ明治時代ニ涉ルモノ	専ら明治時代ニ關スルモノ	雜類	計
掛物	一五一	二三	二二	八五	二八一
巻物	三三	〇	六	六	四五
書籍	二五五 (四五七)	七三 (五六三)	五五 (七六七)	二二六 (三三五)	六〇九 (一一、一二二)

帖	四	四	〇	五	一三
寫真	四五	一四	一〇八	一二三	二八〇
額面	一八	〇	七	二	二七
遺品	四〇	一三	三	一三	六九
屏風	一九	〇	四	〇	二三
通計	五六五	一二七	二〇五	四五〇	一、三四七

〔備考〕 右表中の書籍欄右傍の數字は部數を示し、左傍括弧内の數字は冊數を示したのである。通計には部數を採り、其冊數は省くことにした。

わが附屬圖書館に於ては、藏品を整理保存して、ひとり之を祭典の折展觀するに止めず、時々來訪する篤志家の需に應じても觀覽せしむるは勿論、或は之を幕末維新史研究の資料に供し、或は特に詮衡を経て之を公共教育團體主催の展覽會にも出品して、一般の參考資料に供する等、機會ある毎に國民精神の作興に資し、思想善導に裨補あらしむるを期し、以て松陰先生並に子爵の遺志達成に努めて居る。



明  
改  
書



掛  
物  
之  
部

尊  
攘  
堂  
目  
録  
走  
号

(筆自爵子川品) 頁初 錄 目 品 藏 堂 攘 尊

四 遺墨・遺品主要目錄

▲掛物之部

吉田松陰 畫像	松浦松洞畫 松陰自贊	一幅	高山彦九郎和歌	墓前唱和之一	一幅
吉田松陰 書翰	品川彌二郎宛 萩野山獄 中にて認めしもの	一幅	佐久間象山筆	題那波利翁像詩	一幅
吉田松陰 書翰	堀江克之助宛 江戸傳馬 町獄中にて認めしもの	一幅	佐久間象山筆	山水圖自贊	一幅
吉田松陰 詩稿	松柳詩	一幅	梁川星巖筆	七絕詩	一幅
吉田松陰 筆	日孜字思父說、書翰及 詩稿	一幅	德川齊昭書翰	安政甲寅元旦之詩二首	一幅
品川彌二郎筆	吉田松陰遺訓	二幅	藤田東湖筆	三木幾右衛門宛	一幅
高杉晋作筆	弔吉田松陰詩	一幅	藤田東湖筆	江戸小梅水哉舍記	一幅
高杉晋作筆	三田尻港船問屋の角行 燈に書せし詩	一幅	中山愛親和歌	人生在于勤云々の語	一幅
久坂玄瑞筆	文天祥正氣歌	一幅	三條西季知和歌	濱千鳥	一幅
久坂玄瑞筆	送松浦松洞之序	一幅	中山忠光書翰	寒松	一幅
久坂玄瑞筆	七絕詩	一幅	三條實美筆	大庭傳七宛	一幅
入江弘毅筆	吉田松陰留魂錄寫	一幅	大原重德筆	道天地將法 長州集義 隊之旗甲子の亂に用ひ しもの	一幅
			玉松操和歌	訓語 入江弘毅叙辭	一幅
				都月及錢林瀆英序	一幅

梅田雲濱和歌	さくら咲	一幅
土屋蕭海筆	擬誠諭從駕衆士文及書翰	一幅
村田清風筆	七絶詩	一幅
吉田稔麿筆	毛利家よりの賞詞並に同人遺墨	一幅
周布政之助筆	題梅林圖詩 縣小坡梅林圖	一幅
松浦松洞筆	壽老人圖	一幅
松浦松洞筆	源實朝那須篠原之圖	一幅
益田右衛門介筆	萬山不重云々の語	一幅
眞木保臣筆	述懷之句	一幅
天王山殉難十七士圖	僧悟庵畫 僧天章題詩	一幅
同	藤原玉雲畫	一幅
伴林光平筆	醫藥のことを記せるもの	一幅
高杉晋作筆	五言古詩扇面山水扇面合装	一幅
武市瑞山筆	吉田松陰之詩	一幅
中岡慎太郎筆	題八幡公詠落花圖詩	一幅
間崎哲馬筆		一幅
藤森弘庵筆	七絶詩 偶成	一幅
藤本鐵石繪入書翰	忠兵衛宛	一幅
松本奎堂筆	芳野懷古之詩	一幅
三好監物筆	山水圖	一幅
高島秋帆筆	富士山之圖 大槻磐溪贊	一幅
宇喜多一蕙筆	大原女之圖	一幅
木戸孝允筆	遊子函嶺思亡友詩	一幅
大久保利通筆	薩長藝三藩盟約書草按	一幅
山縣有朋筆	今樣歌	一幅
伊藤博文筆	七絶詩	一幅
長谷川強庵筆	醉舞之吟五首 鈴木惕軒識語	一幅
小原鐵心筆	贈函嶺詩二首	一幅
八田知紀和歌	兒島高德	一幅
森 寬齋筆	賀茂行幸圖 八田知紀題詠	一幅
森 寬齋筆	人體的異人圖	一幅
平野國臣肖像	神坂雪佳畫	一幅
武市瑞山肖像	自畫贊並獄中書牘石版摺	一幅



▲卷物之部

佐久間象山書翰

櫻堂（松代藩士山寺常山）並に樂真（同上三村晴山）宛

一卷

吉田松陰書翰

第一卷復來原良三書及古詩佐久間象山、毛利、横井小楠の評あり  
第二卷與治心氣齋山田先生（宇右衛門）第二書  
○與治心氣齋先生第三書  
○送中村百合三（士恭）序  
織田豐臣時代の史論草稿

二卷

吉田松陰文稿

織田豐臣時代の史論草稿

一卷

吉田松陰時事上書草稿

佐世八十郎（前原一誠）入江九市宛 掛取素彦朱註

一卷

久坂玄瑞書翰

天王山に於ける陣中日記の斷簡 日柳燕石識

一卷

久坂玄瑞軍中日記

印藤幸宛四通 品川彌二郎識語

一卷

坂本龍馬書翰

島村衛吉宛

一卷

武市瑞山書翰

東湖の外會澤恒藏、山國喜八郎、金子孫二郎

一卷

藤田東湖外四名書翰

田丸稻右衛門各一通

一卷

三條實美書翰

山縣有朋及品川彌二郎宛六通

一卷

岩倉具視書翰

品川彌二郎宛三通

一卷

木戸孝允書翰

品川彌二郎宛二通

一卷

木戸孝允書翰

品川彌二郎宛三通

一卷

西郷隆盛書翰

品川彌二郎宛三通

一卷

山縣有朋復命書草案

薩長聯合の件藩主へ復命書

一卷

入江弘毅

弘毅の外杉山松介、時山直八各一通

一卷

外二名書翰

伴林光平、藤本鐵石、嵩眞齋、松浦八郎、清川八郎の書翰各一通

一卷

烈士遺墨

松浦八郎の書翰各一通

一卷

松下村塾一燈錢申合帳

前川五嶺原畫、森雄山模寫

二卷

甲子兵燹圖

津崎村岡、頼三樹、藤本鐵石、平野國臣外二十餘人の筆蹟

一帖

英傑遺墨

尺牘喜多村藤馬宛

一卷

來島又兵衛筆

尺牘喜多村藤馬宛

一卷

佐久間象山書

合作

一卷

紅蘭女史畫

合作

一卷

▲額面之部

吉田松陰筆	萩藩主へ建言の草案	一面
吉田松陰筆	史論草稿	一面
吉田松陰筆	與品川思父(彌二郎)詞	一面
品川彌二郎肖像	松岡壽畫	一面
品川彌二郎筆	元治甲子二十五年祭殉難士遺墨展覽會の際作れる俚語	一面
山縣有朋筆	尊攘堂の三字額	一面
頼山陽筆	勤王の二字額	一面
松平春嶽筆	光霽風月處	一面
成就院月照筆	くもりなき云々の歌外數首	一面
高杉晋作肖像	木炭畫	一面
森 寬齋筆	十萬堂女人形記	一面
越後妙見山戰場見取圖	山縣有朋題詠	一面
長州遊擊軍高札	高杉晋作案文 伊藤俊輔(博文)書	一面
▲書籍之部		
李氏焚書抄	吉田松陰自筆	二冊

愚論其他數篇	吉田松陰自筆	一冊
在京日記	高山彦九郎京都滯在中の自筆	一冊
江月齋日乘	久坂玄瑞江戸滯在中の自筆	一冊
思 廬 儘	久坂玄瑞自筆漫錄三卷合	一冊
日 鑑	藤本鐵石自筆草稿	一冊
野史	飯田忠彦自筆	三冊
孫子正文	吉田松陰自筆	一帖
いろは帖	西郷隆盛書	一帖
奇兵隊日記	自文久三年六月至明治二年七月 附地圖四十八葉	二十九冊
尊攘堂稿本	品川彌二郎手校	二冊
尊攘堂藏品目錄	品川彌二郎手錄	一冊
尊攘堂志士傳記	品川彌二郎編	三冊
尊攘堂志士履歷書	品川彌二郎編	二冊
歐洲新聞	御堀辨助自筆 歐洲新聞を抄録和解せしもの	一括
江戸錦繪交張		二冊

▲品物之部

酒	大	紙	軍	肩	肩	小	短	刀	樂	陣	蔣
瓶	瓢	捻	扇	印	印	刀	刀		燒	繪	繪
		襦							文	硯	硯
勸王諸士の使用せしもの	尖戸左馬之介の遺愛品	武田耕雲齋の孫金三郎獄中にて作りしもの	眞木和泉守所用	湯淺五郎兵衛所用	變の節關死せし松田重助所用	元治元年京都池田屋事	維新前品川彌二郎の佩用せしもの	奥羽征討軍參謀世良修藏所持	有栖川宮家より徳川齊昭へ御下賜品	錦旗の遺片を以て製せしもの品川彌二郎着用	明治天皇より品川彌二郎へ御下賜品
一對	一個	一枚	一個	一個	一個	一振	一振	一振	一個	一蓋	一個

山縣	大原	三條	高杉	毛利	同	佐久間象山	寫眞	石火矢砲丸	軍川鍋	地震計	歌かるた
有朋	重德	實美	晋作	忠正	上	自ら寫眞術を研究し人に寫さしめしもの	眞	下關砲撃の際用ひしもの委しくは箱に記文あり	天王山陣中にて眞木和泉守の使用せしもの	佐久間象山の考案	水戸藩主徳川齊昭の選
明治廿九年	明治十一年			慶應二年寫							一箱
御堀	時山	所	中御門經之	廣澤	麻田	木戸	木戸	一個	一個	一個	
耕助	直八	郁太郎		眞臣	公輔	孝允	孝允				
				頃寫		英倫	英倫				
				三年		敦	敦				



品川彌二郎 慶應二年京 森 清藏

同 上 明治廿八年 加屋 軍太

舊尊攘堂表座敷 高倉通錦小路上ル

同 上 庭園

松下村塾舊跡

佛國軍艦下關砲撃圖

▲屏風之部

屏風二曲折 僧月照僧、信海、小林良典、伴林光平等外二十數人ノ短冊及書翰其他

同 二曲折 武市半平太(茗桐)栄、墨ノ竹園

同 六曲折 大久保利通、大村益次郎、世良修藏、山田顯義等外二十數人ノ書翰

同 六曲折 廣澤兵助、井上馨、伊藤博文其他十數人ノ書翰

屏風六曲折 毛利慶親、三條實美、德川齊昭、美玉三平、田中綏猷、鶴飼吉左衛門等百數十人ノ短冊

同 六曲折 大樂源太郎、伊藤博文、御堀耕助、入江九市、大久保利通等外十數人ノ書翰

同 六曲折 松本鼎、木戸孝允、大久保利通、黒田清隆、山田顯義外十數人ノ書翰

同 六曲折 木戸孝允、前原一誠、川村純義、廣澤兵助、山田顯義外十數人ノ書翰

同 六曲折 鍋島閑叟、八田知紀、山縣有朋、長三洲等十數人ノ遺墨

五 尊攘堂  
創立者 子爵品川彌二郎略傳

品川彌二郎は、諱を日孜、字を思父と稱し、扇州、苦談樓、また念佛庵主と號した。天保十四年閏九月二十九日、長州萩の東郊松本村(即ち松下村 塾の所在地)に生れた。父は彌市右衛門、母は滿津と言つた。安政四年、歳十五にして甫めて吉田松陰の門に入り、誠實剛直を以てその愛するところとなつた。翌五年、松陰が討幕の實踐運動を計畫し、野山の獄に投ぜられると、彌二郎は同門の士と結び、師の罪名を糾さんとしたが、舉動過激の故を以て謹慎を命ぜられた。安政六年十月松陰刑死の後、萬延元年彌二郎は江戸に上つたが、再び萩に歸り、文久二年の頃、久坂玄瑞、高杉晋作等と共に京攝、江戸の間を來往して、盛に尊王攘夷の大義を唱道した。翌年正月、同志高杉、久坂、伊藤俊輔等と謀り、先師の遺骨を小塚原より世田ヶ谷村の若林に移葬した。元治元年、甲子の變には、八幡隊を指揮して勇戦苦闘し、戦敗るるに及び、重圍を破つて血路を開き、脱出するを得て西歸した。其の後一時勢力を得たる藩の恭順黨と争ひ、専ら藩論の回復統一に力を盡した。慶應元年十二月、薩藩士黒田清隆長州に來り、藩長二藩の同盟を提唱したので、彌二郎は木戸孝允と相携へて京師に入り、橋本八郎と變名して薩州邸に潛伏し、薩の藩老小松帶刀、及び西

郷隆盛、大久保利通等を説き、遂に兩藩の連盟は結成した。かくて彌二郎は京地の情報を故國に傳へ、維新回天の事業は着々進み、慶應三年王政復古の大號令は渙發せられた。彌二郎が裏面に於ける苦心盡力の尠からざりしは言ふまでもない。

戊辰の役、彌二郎は御盾隊を率ゐ、東北各地に轉戦して功を樹て、明治二年彈正少忠に任ぜられた、時に年二十七。三年六月、普佛戰爭見聞のため歐洲に派遣せられ、四年獨逸留學仰付られたが、六年獨逸公使館勤務を命ぜられ、七年三月外務二等書記官に、尋で一等書記官に進み、青木周藏歸朝中は公使の事務を執つた。九年三月歸朝、權大史兼内務大丞に任ぜられたが、この年十月前原一誠の亂あり、彌二郎は命を承けて赴き、暴徒の鎮定に活躍した。十年一月内務大書記官に任命、會ま西南の役起り、ここに再び西下して熊本に入り、縣令富岡敬明と謀り、人心の鎮撫に寢食を忘れたが、敵の重圍に陥り、危く脱出するを得て京都に歸り、熊本地方の情況を報告した。亂後その功に對し勲四等に叙し、年金下賜の御沙汰があつた。

十二年五月地理局長に任ぜられ、全國に亘り大規模の地質調査に従事し、十三年二月内務少輔を以て勸農局長を兼ね、東北の開墾に意を注いだ。明治十四年四月農商務省の新設と共に農商務少輔に轉じ、尋で十五年大輔に進んだが、その間、産業の發達、殖産興業の施設に貢獻し、大日

本農會、大日本山林會、大日本水産會の創設にも參畫した。明治十七年勳功により子爵を授けられ、特旨を以て華族に列せられた。十八年特命全權公使に轉じ、獨逸駐劄を命ぜられたが、健康を害して久しく留まるを得ず、二十年の春歸朝とともに、先師松陰の志を紹いで尊攘堂を建設したことは既に述べた。

翌二十一年樞密顧問官に任ぜられ、宮中顧問官を兼ねたが、更に御料局長を兼ねるに至り、銳意熱心に宮廷財政の大整理を圖り、拮据四年に涉り、大に成績を挙げたので、朝野大に其の功勞を稱讃した。二十四年五月松方内閣成立し、入つて内務大臣となり、大に風紀の振肅を圖つた。同年十二月第二議會の開會に當り、在野黨は多數を恃み、政府の施設提案を阻止せんとする傾きがあり、かつ子爵の心血を注ぎし信用組合法案には、政府部内にも反對があつたので、彼は敢然衆議院の解散を主唱し、これが斷行をみた。其の後に於ける子爵の政治的活動が極めて顯著なるもののあつたことは、今猶世人の記憶に新なる所である。即ち朝にあつては有名な選舉干渉を行ひ、野に下りては、西郷從道伯と共に國民協會を建て、國家主義の爲に盡瘁せらるること約七年間、入つては國務の樞機に參し、出でては世道人心を鼓舞激勵せられたことも世間周知の通りである。かくの如く、子爵は始終國家を念とし、絶えず淬礪の誠を效したのであつたが、三十三

年春感冒に罹り、更に肺炎を併發して、二月二十六日終に薨去せられた。享年五十八歳。病革るや特に位一級を進められ、正二位に叙し勳一等旭日大綬章を賜ふの恩命に浴した。法諡、至誠院釋一貫日孜居士、遺骨を京都東山の靈山墓地に葬つた。

子爵は、徹頭徹尾、至誠熱血の人で、奉公の念が強烈であつた。其廉潔なることは近時其儔を見ざる程で、赤貧洗ふが如き中に在つて、猶人の急に赴きたるが如き佳話美談は枚舉に遑がないほどである。又詩歌、文章に長け、敬神崇佛の念に篤かつた事は幾多の實績が之を證明してゐる。その産業及び教育に貽した偉績に至つては、後人が今尙其の徳と功とを讃仰して止まないところである。子爵は單り尊攘堂のこのみならず、總ての方面に於て先師松陰の遺志、遺業を繼紹して、その成就に努めたものと謂ふべきである。

# 六 尊攘堂委員

明治三十五年約定書作製に際し記名調印した委員は左の諸氏であつた。

子爵 野村 靖	子爵 品川 彌一	品川家 親族	山縣伊三郎
同 山根 正次	同 中村 精男	男爵	平田東助
島地 默雷	(以上東京)		
松本 鼎	阿武 素行		伊東陶山
林 新助	田中 治兵衛		今井貞次郎
八木 良則	深見伊兵衛		西谷 成造
伊藤平左衛門	飯川 新七		清水六兵衛
池田 清助	並河 靖之		西村總左衛門
川島甚兵衛	齋藤卯兵衛		田中利七
佐々木清七	辻 信次郎		辻 忠三郎
辻 忠四郎	安盛善兵衛		川端彌七

内藤小四郎

竹村彌兵衛

藤村岩次郎

綿貫吉秋

吉田佐吉

鬼頭玉汝

神坂吉隆

森勇太郎

(以上京都)

昭和十二年十二月委員代表の氏名は左の如し

公爵 山縣有道

子爵 野村益三

飯田新七

神坂吉隆

今井貞次郎

因に京都市内高倉錦小路に在つた舊尊攘堂趾は既述の如く、現今銀行集會所となつてゐるが、當時の庭園泉石の一部は今猶依然同地域内に保存せられ、往年の名残りを止めてゐる。又舊建物(平屋造、十二室)は明治三十三年十二月、田中源太郎が譲り受け、一時銀行集會所にて徒弟講習所に宛ててゐたが、其後伏見の平井熊三郎が買受けて、之を伏見堀内村に移し二階建に改築した。

## 尊攘堂年譜

年次	尊攘堂	松陰歿後	生品(彌二郎)	事	參照
明治	年	松陰歿後	生品(彌二郎)	子爵品川彌二郎獨逸ヨリ歸朝ス(二月)	岡本三右衛門(櫻團)歿、年六十五
二〇	一年	二十八年	四十五歲	彌二郎先師吉田松陰ノ遺志ヲ紹キ京都市高倉通錦小路ニ尊攘堂ヲ創設ス(三月) 爾後毎年殉難志士ノ祭典ヲ營ミ國民ノ士氣ヲ鼓舞ス	
(丁亥)				彌二郎宮中顧問官ニ任ゼラル(六六)	
二一	二年	二十九年	四十六歲	彌二郎樞密顧問官ニ任ゼラル(四一〇)	伊藤博文樞密院議長ニ任ゼラル(四一〇)
(戊子)				松陰靖國神社ニ合祀セララル(五、五) 彌二郎尊攘堂ニ於テ甲子殉難士二十五年祭ヲ執行ス(八、二六)	
二二	三年	三十年	四十七歲	彌二郎特旨ニ依リ正四位ヲ贈フル(一一、二二)	伊藤博文ニ元勳優遇ノ詔勅ヲ賜フ(一一、二二) 山縣(有朋)第一次内閣成ル(三、二四)
(己丑)				彌二郎ハ伊藤、井上、野村等ト神戸ニ會シ内閣組織ニツキ周旋ス(二、二)	
二三	四年	三十一年	四十八歲	有栖川宮熾仁親王萩松下村塾並杉郎ニ合臨(六、三三)	杉百合之助妻瀧子(松陰母)歿、年八十四(八、二六)
(庚寅)				松下村塾改修成ル(八、八)	
二四	五年	三十二年	四十九歲	公爵三條實美參拜遺品觀賞(四、二六)	
(辛卯)				彌二郎內務大臣ニ任ゼラル(六、一)	三條實美薨、年五十五(二、二六)
				松本鼎、富岡鐵齋、森寬齋等參集祭典ヲ營ミ爾後本日(鎮政忌)ヲ例祭日ト定ム、鐵齋「しのお草」ヲ執筆ス(六、四)	高杉晋作、久坂義助、寺島忠三郎、入江九市等贈正四位(四、一)
				子爵清岡公張、島地默雷(八、八)吉田庫三、江木千之(二〇、二)	吉田松陰、杉山松介等贈從四位(三、二七)
				等參拜彌二郎信用組合法案其ノ他ノ衆議院通過ニ全力ヲ注グ(三、一)	田松陰先生遺文刊(六、一) 吉田松陰傳(八、一) 松陰遺著「幽囚錄」刊(八、一)



二五	六	三十三	五十	歲	有栖川宮熾仁親王「尊攘」額御染筆ヲ賜フ 彌二郎樞密顧問官ニ任ゼラル(三、二) 彌二郎西郷從道ト柱彌ニ長門尊攘堂設立ヲ依囑ス(六、) 松本鼎森寬齋、富岡鐵齋等ノ縁故者十六名參集例祭 ヲ執行ス(六、二六) 財實岡崎邦輔(四)等參拜 彌二郎全國遊説ノ途ニツク(八、五)	伊藤(博文)第二次内閣成ル (八、八) 山田顯義薨、年四十九(二、二四)
(壬辰)	七	三十四	五十一	歲	男爵寺島秋介(五)參拜 松本鼎等八名參集例祭ヲ執行ス(六、二六) 彌二郎京都靈山招魂場ニ於テ甲子殉難烈士三十年祭ヲ 執行ス(九、五)	徳富猪一郎著「吉田松陰」刊
二六	八	三十五	五十二	歲	本年ハ例祭ヲ取止ム	森寬齋歿、年八十一(六、二) 野村靖内務大臣ニ任ゼラル (二〇、) 松陰遺著「外蕃通略」刊
(癸巳)	九	三十六	五十三	歲	松本鼎、富岡鐵齋、近藤芳介、天田鐵眼、川崎三郎、 川島甚兵衛、西村總左衛門等參集例祭ヲ執行ス(六、二六) 柏川盛文(四)寺内正毅(五)等參拜	有栖川宮熾仁親王薨去、御年 六十一(二、二八) 白根專一通信大臣ニ任ゼラル (二、二八) 松陰遺著「俗簡撰輯」刊
二八	十	三十七	五十四	歲	松本、富岡等二十九名參集例祭ヲ執行ス(六、二六) 井關美清(四)田中一介村田米次郎(八)等參拜 彌二郎嵯峨天龍寺ニ於テ甲子殉難烈士三十三回忌法會ヲ 執行ス(八、二七)	毛利元徳薨、年五十七(三、三) 野村靖通信大臣ニ任ゼラル (九、) 國木田獨步編「吉田松陰文」刊
二九	十	三十七	五十四	歲		
(丙申)	十	三十七	五十四	歲		
年次	尊攘 大業	松陰 歿後	品川彌二郎 生	記	事	參 照

[illegible]

三 五	十六年	四十三 年	二 年	松本縣以下委員會合、規約ヲ設ケ祭典資金三千圓ヲ繰 出シ毎年其利息ヲ以テ祭典費ニ當ツルコトヲ決定ス (三) 尊攘堂新築工事開始セラル 尊攘堂内ニ安置スベキ松陰、品川兩先賢ノ木像二體 (足田雪洲作) 成ル(夏)	西郷從道墓、年五十九(七、八)		
(壬寅)							
三 六	十七年	四十四 年	三 年	尊攘堂新築工事落成ス(四) 松本縣外二名ノ代表委員ヨリ吉田、品川兩先賢ノ木像 二體ヲ京都帝大ニ寄附ス、京都帝大ニテハ右木像二體 ヲ始メ寄贈品ヲ附屬圖書館ニテ保管セシム 皇后陛下(後ノ昭憲皇太后)京都帝大行啓、尊攘堂遺品 土曜遊バサル(五) 毎年二回ノ祭典ヲ一同(四月第一 土曜日) 執行スルコトニ改ム(六)			
(癸卯)							
三 七	十八年	四十五 年	四 年	例祭執行(四) 中澤岩太寄贈ノ松岡壽筆品川子肖像畫成ル(六)	天田愚庵(鐵眼) 歿、年五十一 (二、七)		
(甲辰)							
三 八	十九年	四十六 年	五 年	例祭執行(四八) 大日本農會於靈山品川子墓前祭ヲ行フ(六、三六)	鳥尾小彌太墓、年五十九 (四、四)		
(乙巳)							
三 九	二十年	四十七 年	六 年	例祭執行(四八) 舊尊攘堂建物ハ平井熊三郎買受ケ之ヲ 伏見堀内村ニ移築ス(七) 舊庭園ハ現在銀行集合所内 ニ保存セラル	山縣伊三郎通信大臣ニ任ゼラ ル(二、七)		
(丙午)							
四 〇	二十一年	四十八 年	七 年	例祭執行(四、三) 松本縣以下委員會合、規約ヲ設ケ祭典資金三千圓ヲ繰 出シ毎年其利息ヲ以テ祭典費ニ當ツルコトヲ決定ス (三) 尊攘堂新築工事開始セラル 尊攘堂内ニ安置スベキ松陰、品川兩先賢ノ木像二體 (足田雪洲作) 成ル(夏)	乃木希典學習院長ニ任ゼラル (二、三) 松本縣(委員) 墓、年六十九 (三、三) 林友幸墓、年八十五(二、一)		
(丁未)							
年次	尊攘堂	松陰歿後	品川彌二郎 後	記	事	參	照

年次	尊攘堂	松陰發後	品川彌二郎	記	事	參照		
四一	二十二年	四十九年	八年	例祭執行(四、二) 皇太子殿下山口ニ行啓、御使ヲ松下村塾ニ差遣セラル (一、二) 菊池大麓總長ニ任ゼラル(九、三) 東京松陰神社ニ於テ松陰五十年祭執行、宮中ヨリ祭祀 料御下賜(一〇、五) 野村靖松陰自贊畫像ヲ外十一點ヲ寄 贈ス(二〇、六) 吉田庫三ヨリ松陰遺著ヲ兩陛下並皇太 子、同妃兩殿下ニ獻納ス(一〇、六) 大森鍾一(京都府教 育會長)松陰ノ「山河襟帶」詩碑ヲ岡崎公園ニ建ツ	桂(太郎)第二次内閣成ル(七、 一) 平田東助内務大臣ニ任ゼラル (一、四) 吉田庫三「松陰先生遺著」初卷 刊(一〇、三) 徳富猪一郎「吉田 松陰」(改版)刊(一〇、六) 五十嵐越郎「吉田松陰實行録」 刊、松陰遺著「孫子評註」刊			
四二	二十三年	五十年	九年	例祭執行(四、一〇)	野村靖(委員)薨、年六十八(一、 三) 伊藤博文薨、年六十九(一、 三) 帝國教育會編「吉田松 陰」刊(一、三) 吉田庫三編「松 陰先生遺著」第二卷刊(一〇、七) 同人編「松陰先生女訓」刊	村田肇次郎著「品川子爵傳」刊 (四、六) 木下廣次薨、年六十 (八、三) 杉民治「松陰家兄」發 年八十三(一、一) 松陰遺著「武教講錄」全二、刊		
四三	二十四年	五十一年	十年	例祭執行(四、九) 司書官石川一附屬圖書館長ニ補セラル(七、五)	島地默雷(委員)發、年七十四 (二、三) 阿武素行(委員)發、年七十二 (七、三)	梶取素彦薨、年八十四(八、二) 乃木希典薨、年六十四、夫人 靜子發、年五十四(九、三) 桂(太郎)第三次内閣成ル(二、 三) 田中治兵衛(委員)發、 年六十八(二、九)		
(庚戌)	四四	二十五年	五十二年	十一	例祭執行(四、八) 教授新村出附屬圖書館長ニ補セラル(一〇、一) 皇太子殿下京都帝大行啓、圖書館御巡覽遊バサル(二、一)			
(辛亥)	大正	(七、三)	元	二十六年	五十三	十二	例祭執行(四、一) 久原躬茲總長ニ任ゼラル(五、三) 男爵周布公平參拜(一〇、三)	
(壬子)								

二	二十七年	五十四年	十三年	例祭執行(四、一三) 澤柳政太郎總長ニ任ゼラル(五、九) 川島元次郎ニ藏品ヲ調査報告セシム(五、)	桂太郎立憲同志會ヲ作ル (二七、)
三	二十八年	五十五年	十四年	例祭執行(四、一二) 東京帝大總長山川健次郎總長ヲ兼任(八、九)	桂太郎薨、年六十八(一〇、一一) 堀真五郎歿、年七十六(一〇、三)
四	二十九年	五十六年	十五年	例祭執行(四、一〇) 荒木寅三郎總長ニ任ゼラル(六、五) 子爵末松謙澄、柴田家門等參拜(二、)	井上馨薨、年八十一(八、一) 伊藤痴遊著「吉川松陰」刊 世木鹿吉共著「吉田寅次郎」刊 杉浦重剛著「吉田松陰實行錄」刊 武田鶯塘著「吉田松陰實行錄」刊
五	三十年	五十七年	十六年	例祭執行(四、八)	寺内(正毅)内閣成ル(一〇、三) 碧瑠璃園著「吉田松陰」刊
六	三十一年	五十八年	十七年	本年度ヨリ藏品十點ヲ限リ六ヶ月間山口縣教育博物館ニ貸附ス(五、九) 山縣有朋等東京九段ニ於テ殉難烈士五十年祭ヲ執行ス(八、四) 大正天皇京都帝大ニ行幸、圖書館ニ於テ標本、古文書ヲ天覽遊バサル(二、一) 例祭執行(四、一)	
七	三十二年	五十九年	十八年	例祭執行(四、一三)	
年次	尊攘堂	松陰歿後	品川彌二郎後	記事	參照

年次	尊攘堂	松陰歿後	品川彌二郎	記	事	參照
八	三十三年	六十年	十九年	例祭執行(四、三)		河瀨眞孝薨、年八十(九二) 日本史籍協會編「尊攘堂書類 雜記」刊(二〇)、 寺内正毅薨、年六十八(二、三)
(己未)				産業組合主催ニテ十五日間萩町ニ品川子遺物展覽會開設ニツキ藏品二十八點ヲ出展ス(三、二五) 例祭執行(四、一〇)		杉孫七郎薨、年八十六(五)、 初代伊東陶山(委員)歿、年七十六(九、四)
九	三十四年	六十一年	二十年			
(庚申)				京都在住ノ委員並大學側係員會合協議ノ結果自今十月二十七日(松陰忌)ヲ例祭日トナシ三年目ニ大祭執行ノコトニ改定ス(三、一三) 例祭執行(四、三)		
一〇	三十五年	六十二年	二十一年			
(辛酉)				久通宮邦彦王、同多嘉王妃殿下御同列ニテ京都帝大創立二十五周年記念式ニ台臨ニツキ、御休憩所ニ於テ藏品屏風ヲ台覽ニ供ス(六) 例祭執行(二、三、七) 皇后陛下(現皇太后)台臨、陳列ノ藏品ヲ台覽遊バサル(二、五)		山縣有朋薨、年八十五(二、三) 吉田庫三(松陰曾孫)歿、年五十六(六、二) 未亡人茂(杉山久一)女(當主タリ) 高橋淡水著「松陰ト其門下」刊 平田東助内大臣ニ任ゼラル(九、八)
(壬戌)	三十六年	六十六年	二十二年			
一二	三十七年	六十四年	二十三年	大祭執行ノ年ナリシモ關東大震災ニツキ明年ニ延期シ例祭ヲ執行、自今神坂雪佳、今井貞次郎ヲ常務委員トナス(一〇、七)		
(癸亥)						



年次	尊攘堂	松陰發後	品川彌二後郎	記事	參照
年次	尊攘堂	松陰發後	品川彌二後郎	記事	參照
四	四十三年	七十年	二十九年	新城新藏總長ニ任ゼラル(三、三) 東京青山會館ニ於ケル安政大獄殉難志士遺墨展覽會ニ 藏品數點出展ス(一〇、八) 例祭執行(一〇、一七)	田中義一薨、年六十七(九、二九) 青山會館編、松門烈士遺墨集 刊(一三三) 大久保龍著吉田 松陰先生傳、刊
(己巳)					
五	四十四年	七十一年	三十年	大島健一參拜(四、六) 京大開校記念日ニ當リ堂内ニ藏品ヲ陳列シ一般ノ觀覽 ニ供ス(五、一〇) 例祭執行(一〇、二七)	中村精男(委員)歿、年七十六 (三三) 廣瀬豐著吉田松陰ノ 研究、刊(二五)
(庚午)					
六	四十五年	七十二年	三十一年	東伏見大妃(周子)殿下合臨、遺品合覽(五、一九) 山口縣長府町桂彌一ハ品川彌二郎生前ノ依囑ニ因リ長 門尊攘堂建設ニ着手ス(九) 大祭執行、松陰門人渡邊高藏代(末女八百子)萩ヨリ參 拜ス(一〇、二)	吉田松陰「野山獄中讀書記」刊 (複製)(三) 後藤三郎著「吉 田松陰ト其教育」刊(四、五) 武岡豊太歿、年六十八(六、九) 山本悌二郎農林大臣ニ任ゼラ ル(二、三三)
(辛未)					
七	四十六年	七十三年	三十二年	山口縣知事長門尊攘堂設立ヲ認可ス(二、三三) 東京松陰神社府社ニ列セラル(二、三) 本派本願寺ニ於テ品川三十三回忌法要ヲ營ミ午後靈 山ニ於テ墓前祭執行(二、三) 産業組合主催ニテ品川子遺墨展覽會ヲ長門萩ニ開催ス (四、八、一〇) 桂彌一(八十四翁)上洛參拜(一〇、二二)・ 例祭執行(一〇、二七)	廣瀬豐著「續吉田松陰ノ研究」 刊(一〇) ステヴンソン原著「吉田寅次 郎」孝平譯註「吉田寅次 郎」刊 安藤紀一著「訓註野山文稿」刊
(壬申)					
八	四十七年	七十四年	三十三年	小西重直總長ニ任ゼラル(三、) 有栖川宮熾仁親王御染筆尊攘額ヲ複製シテ長門尊攘 堂ニ贈ル(六) 松井元興總長ニ任ゼラル(七、七) 澄宮殿下萩松陰神社合臨(八、九) 藏品若干長門尊攘堂貸附ニ決ス(六、三三) 長門尊攘堂並萬骨塔竣工式ヲ舉グ(一〇、一〇) 例祭執行、伯爵清浦奎吾參拜(一〇、一七)	福本義亮著「吉田松陰ノ殉國 教育」(一三) 八木宗兵衛(委員)歿、年七十 (七、三) 安藤紀一著「訓註幽囚錄」刊
(癸酉)					



九	(甲戌)	四十八年	七十五年	三十七年	松岡洋右參拜遺墨觀覽(三、七) 伏見元帥宮殿下長門尊攘堂台臨(三、五) 英始ノ來賓多數參列、午後ハ久通宮多嘉王、同妃兩殿 下台臨遺品台覽、志士遺族男爵寺島敏三、杉道助(民 治孫)並德富蘇峯夫妻等參拜(四、七)	廣瀬豐著「松陰先生ノ教育力」 刊(五、三〇)
一〇	(乙亥)	四十九年	七十六年	三十五年	子爵毛利元秀夫妻參拜(三、六) 長谷川爲治ヨリ來鳥又 兵衛年志士ノ遺墨四點ヲ寄贈ス(七) 閑院宮春仁王、同妃兩殿下長門尊攘堂台臨(六、三〇) 竹田宮妃殿下同上台臨(四、三三) 例祭執行(四、七)	紀平正美著「吉田松陰ノ留魂 錄」刊 福本椿水著「孫子訓註」刊 廣瀬豐著「士規七則講話」刊
一一	(丙子)	五十年	七十七年	三十六年	教授羽田亨圖書館長ニ補セラル(一〇、九) 例祭執行(四、七)	山口縣教育會編「吉田松陰全 集」十卷完成(五) 玖村敏雄著「吉田松陰」刊 (三、三〇)
一二	(丁丑)	五十一年	七十八年	三十七年	尊攘堂創立五十周年記念トシテ岡崎公園内「山河襟帶」 詩碑ノ位置表示石標ヲ建ツ(三、三) 關東廳開設三十年記念ニ當リ旅順博物館ニ藏品四十餘 點ヲ出展ス(五、一三〇) 濱田耕作總長ニ任ゼラル(六、三〇) 創立五十周年記念大祭執行(四、七) 文部大臣侯爵木戶幸一參拜遺墨觀覽(二、一)	伊東陶山(二代)(委員)歿、年 六十八(元、七) 廣瀬豐編「吉田 松陰書簡集」刊(四、五) 關根悅 郎著「吉田松陰」刊(五、) 萩市 教育會編「松陰先生遺墨寫眞 帖」刊(五、) 尊攘堂委員編「尊 攘堂ノ由來及年譜」刊(四、八) 福本義亮著「吉田松陰殉國詩 歌集」刊(三、二二) 山本悌二郎 著「年六十八」刊(二、一五)
年次	尊攘堂	松陰歿後	品川彌二郎 後那	記	事	參照

年次	尊攘次堂	松陰歿後	品川彌二郎後部	記	事	參照							
一三	五十二年	七十九年	三十八年	公爵山縣有道、子爵野村益三、飯田新七、神坂吉隆、今井貞次郎等委員代表ハ祭典基金五千圓ヲ本學ニ寄附ス、本學ハ該基金ニ依リ爾後祭典執行ニ當ルコトニ決ス(三二六)	文部大臣男爵荒木貞夫來學遺品觀覽(六六)	例祭執行、品川子爵墓前祭ヲ營ム(一〇三七)	羽田亨總長ニ任ゼラル(二二五)	來栖守衛著「松陰先生ト吉田松鷹」刊(一〇三三)	長野縣松代ニ象山神社創設セラル(二二三)				
(戊寅)				教授本庄榮治郎圖書館長ニ補セラル(一七七)	例祭執行、品川子爵墓前祭ヲ執行ス(一〇三七)	田中光顯薨年九十七(三二六)桂彌一歿、年九十一(六、九)阿武次郎(舊委員)歿、年五十七(八二)渡邊高藏(松門最後ノ一人)歿、年九十七(九八)杉相次郎(民治養子)歿、年八十三(一四)出雲路通次郎(齋主)歿、年六十二(二二五)深見伊兵衛(舊委員)歿、年七十三(三三)田中常太郎(舊委員)歿、年五十五(一〇三三)妙心寺山内ニテ象山七十五回忌法要營マル(二二五)田中惣五郎著「吉田松陰」刊(二二五)	國史普及會員子爵町尻量弘等約五十名遺品觀覽(一二四)	圖書館改築ノ爲尊攘堂ヲ約十五間西方ニ移築ス(三三)	中華帝國山東省長唐仰杜一行八名來觀(五二六)	東北帝國大學總長熊谷岱藏遺品觀覽(八一九)	舊尊攘堂委員石標ヲ尊攘堂前ニ寄附建設ス(一〇)	中山太一、杉道助ヨリ各五百圓寄附(一〇)	皇紀二千六百年記念大祭執行(一〇三七)
一四	五十三年	八十年	三十九年										
(己卯)													
一五	五十四年	八十一年	四十年										
(庚辰)													

昭和十五年十月二十二日 印刷  
昭和十五年十月二十七日 發行

## 京都帝國大學附屬圖書館

京都市中京區壬生坊城町六

印刷者

定池由太郎

京都市中京區壬生坊城町六

印刷所

天進社印刷所

電話壬生 一五四六番